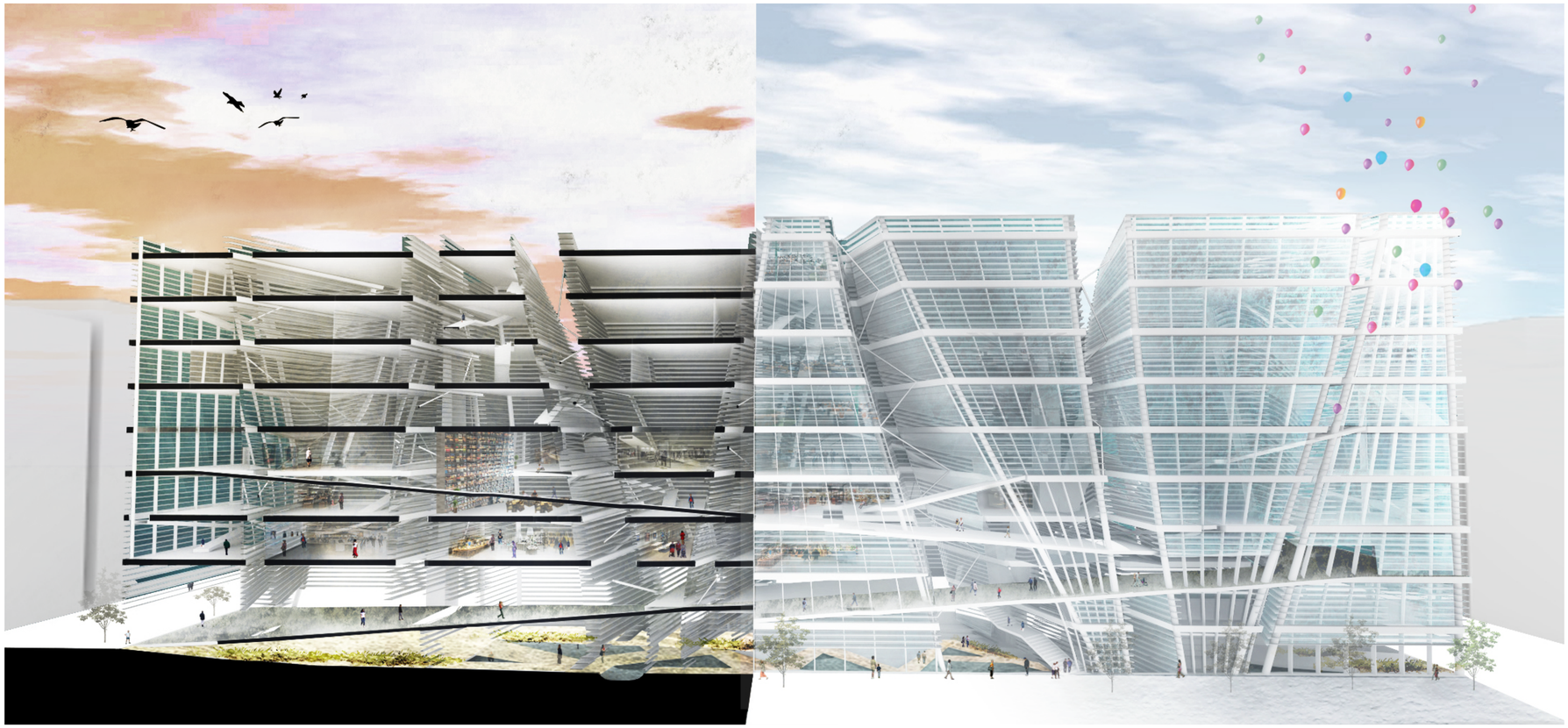
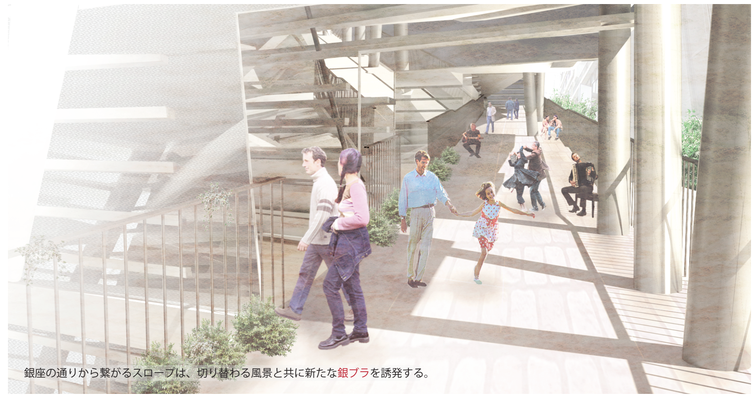


The GINZA

堀と川に囲まれ、船が行き交った銀座。全国の商店街のモデルとなってきた銀座。日本の一流新聞社を生んだ銀座。銀座に根付いた、自然環境・銀ブラ・情報発信の三要素は、まちの経済性や公共性、多様性を生むダイナミクスとして機能し、長年の年月をかけて現在の銀座を築き上げた。またこれらは「銀座フィルター」と呼ばれる目に見えない膜によって覆われ、まちのコモナリティは維持されてきた。しかし、2020 年東京オリンピック・パラリンピックを目前に、より多様化するニーズへの対応が求められ、変化していく銀座に再び「銀座らしさ」を検討するフェーズが訪れた。本計画では、銀座通連合会が策定したまちづくりビジョンという既存の計画を建築に応用することで、8 つの町ごとの持つ銀座フィルターを可視化し、１つの建築として集約させる方法を提案する。

銀座を構成する８つの色が混ざり合い、複合的な銀座というまちがより多様なコモナリティを獲得していく。大きく変わることのない、だけど確実に成長していく、そんな銀座の豊かな未来を望む。

スロープから商業エリアを眺めると、町それぞれの個性が現れた活動が見えてくる。


銀座の通りから繋がるスロープは、切り替わる風景と共に新たな銀ブラを誘発する。

サンクンガーデンにかつての水辺の風景が蘇り、快適で豊かな自然環境をもったくつろぎの場を提供する。

01 歴史に富んだ銀座

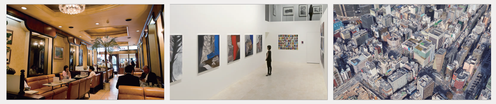
①"商業" をつくった銀座

かつての銀座には百貨店の前身と言われる「勧工場」が数多く存在した。特に、銀座煉瓦街の改築によって作られた勧工場は斜路という要素を初めて商業空間に用いることで、客の動線を立体化した。

銀座の「銀ぶら」にはこうした建築的な操作と絡み合うことで、より多様性に満ちたものになるだろう。

②情報発信する銀座

銀座には多くのギャラリーやカフェーが存在し、8 つに分かれたそれぞれの町ではこうした場を起点に様々な交流を生んできた。これからの銀座では町の個性を尊重しながらも、多様な文化や情報を共有・発信する場が必要かもしれない。



③水景を失った銀座

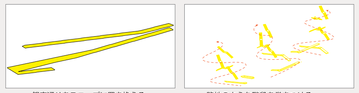
銀座はもともと水のまちであった。江戸時代には堀割と川に囲まれ、水路で物を運んだり、舟遊びも盛んなまちであった。当該地の付近にも三十間堀が通り、水辺には豊かな生態系が作られていた。

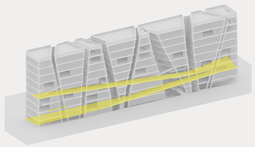
しかし、戦後の瓦礫処理により堀は埋め立てられ、銀座は徐々に生態系を失って行った。もし現代にまでそれが残されていたら、銀座の環境はより豊かなものだったのかもしれない。

02 3 つの手法 ―「新銀座フィルター」の可視化―

①「銀ぶら」の立体化

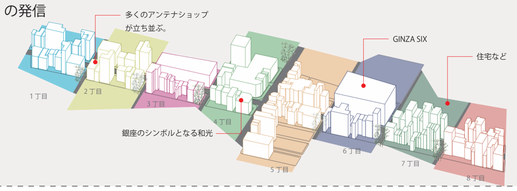
商業の中枢を担う銀座通りには様々な商業施設が面し、１本入ればそこには小さな店が集まっている。そんな「銀座を歩く」という行為がスロープの挿入という銀座の勧工場的手法によって立体化されていく。


銀座通りをスロープに置き換える。　路地のような階段を巻きつける。



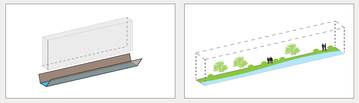
②「まちのカルチャー」の発信

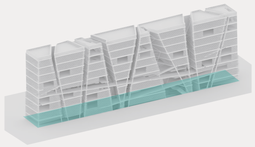
８つの町が持つそれぞれ固有の文化を、１つの建築に集約する。また、8 つに分節したヴォリュームによってそれらの個性が表面化し、町同士の関係性を立面的に提示する。



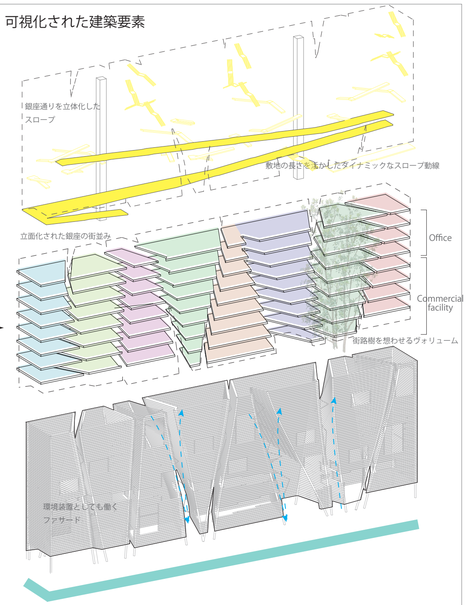
③「堀」の復元

堀の通っていた頃の豊かな環境を取り戻すため、GL-2000 に水辺を有するサンクンガーデンを挿入する。訪れる子ども達の遊び場になる他、潜熱の効果により、快適で豊かな環境が得られる。


建築の足元にオープンスペースをつくる。　水辺をつくり快適な環境を目指す。

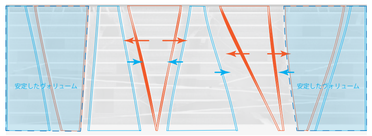


可視化された建築要素



03 "互いに支え合う" 構造体

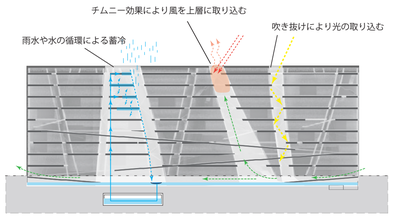
各棟はダンパーを用いて繋ぎ、端と中央部分の安定ヴォリュームと、不安定ヴォリュームの固有周期の差によって地震時の水平力を吸収する。

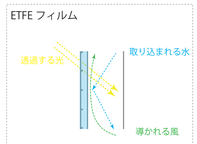


固有周期が短い安定した構造　固有周期が長い不安定な構造

ダンパーによる力の吸収

04 合理的な環境機能



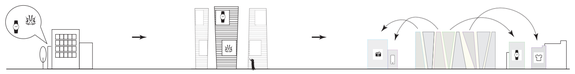


ETFE フィルムを吹き抜けに利用。
環境を取り込むパッシブデザインを実現。

05 町との連携

この建築を構成する棟は、町のステージ。それぞれの町の商店会によって決定されたテナントは、各自の持つキャラクターを、建築に絡みつくスロープに面した店舗で発信する。訪れる者は自然と切り替わる雰囲気に驚き、楽しみ、感化され、町の個性に深く興味を持っていくだろう。町の形態化は銀座の街を再解釈させるきっかけを与え、商業のあり方をより市民に身近なものへと変えて行く。

必要なものは、わたしたちで決められる。そうして成長した街こそが、「The GINZA」なのかもしれない。


街ごとに行うテナント決定　棟ごとに現れるキャラクター　街の広告塔としてフィードバックされる

hlc-085